

会員数 324人

医師会員 113人
コメディカル会員 211人

管理栄養士派遣事業登録数 28人



NPO法人 西東京臨床糖尿病研究会

第34回例会 特大号

去る10月18日(土)NPO法人西東京臨床糖尿病研究会第34回例会が日野市の七生公会堂にて開催されました。あいにくの天候にもかかわらず、約80名の方にお集まりいただきました。参加された皆様は、最新の研究報告に熱心に耳を傾けていらっしゃいました。また、医療関連雑誌の「ばんぶう」も取材に訪れました。



<参加くださった方々>

平成15年10月18日(土)14:30~17:40 七生公会堂
プログラム

挨拶	理事長	貴田岡 正史
糖尿病眼手帳をめぐる	座長 緑成会病院内科部長	調 進一郎
1)眼手帳ができるまで 内科での使用状況	日本糖尿病眼学会 眼手帳作成委員会 委員 立川相互病院 副院長	宮川 高一
2)糖尿病眼手帳の使用状況 眼科医アンケートにより	東京医大八王子医療センター 内分泌代謝科 助教授	大野 敦
糖尿病網膜症の臨床	座長	宮川 高一
光凝固および硝子体手術について	杏林大学 眼科 助教授	平形 明人
パネルディスカッション 糖尿病網膜症における眼科内科連携	司会 東京医大八王子医療センター 内分泌代謝科 杏林大学 眼科 助教授 東京医大 内分泌代謝科 立川相互病院	植木 彬夫 平形 明人 大野 敦 宮川 高一

研究発表会は、「糖尿病網膜症の眼科内科連携」をテーマとし、「糖尿病眼手帳をめぐる」、「糖尿病眼手帳の使用状況」、特別講演「糖尿病網膜症の臨床」およびパネルディスカッション「糖尿病網膜症における眼科内科連携」のプログラムにより、網膜症治療と眼科内科連携の最前線について研究報告がなされました。

ご講演いただいた先生方の中から、報告の原稿をいただきましたので、例会特大号と銘打ち、会員の皆様にご紹介致します。



今号の目次



1 PAGE	例会プログラム	
2 PAGE	糖尿病眼手帳の使用状況 眼科医アンケートにより	大野 敦先生
3 PAGE	糖尿病網膜症と放置中断	宮川高一先生
4 PAGE	パネルディスカッション 糖尿病における眼科内科連携	植木彬夫先生

2) 糖尿病眼手帳の使用状況 眼科医アンケートにより 大野 敦

東京医大八王子医療センター内分泌代謝科 大野 敦

2002年に日本糖尿病眼学会より発行された糖尿病眼手帳（以下眼手帳）の利用状況と眼手帳に対する意識調査を、多摩地域の開業医72名（以下開）と病院勤務医23名（以下病）にアンケート方式で施行した。

1) 眼手帳をすでに利用中は、開65%、病26%で有意差を認めた。

2) 眼手帳を渡すことへの抵抗感はないが73%で、両群の回答結果に有意差はなかった。

3) 精密眼底検査の目安の記載内容は77%が適当と考え、修正点として診察間隔の短縮の意見を認めた。

4) 経過表で記入しにくい項目として、病で開よりも「福田分類」「変化」「糖尿病黄斑症」を有意に多く選択していた。

5) 経過表に追加したい項目は特にないが78%で、両群の結果に有意差はなかった。

6) 眼手帳を網膜症が出現してから渡したいと60%が回答し、あまり渡したくないは病22%、開3%で有意差を認めた。



7) 文書料が保険請求できないことが普及の妨げにならないが67%で、両群の結果に有意差はなかった。

8) 記載内容が臨床経過と食い違った場合でも60%の回答者は診療上不利な状況にならないと考え、両群の結果に有意差はなかった。

9) 眼手帳は眼科医から患者に渡す方が望ましいと41%の回答者は考えており、両群の結果に有意差はなかった。

10) 今後眼手帳は広まるかの質問にはどちらとも言えないが40%と最も多く、背景として医師・患者両者の意識や手帳記入の負担の問題をあげていた。

以上のことより、眼手帳の利用率は開が有意に高く、記入しにくい項目や遅めに渡したい気持ちが病で多かった。



< 熱心に耳を傾ける参加者の皆さん >



< パネルディスカッション風景 >



・光凝固および硝子体手術について

平形 明人

・1) 眼手帳ができるまで 内科での使用状況

宮川 高一



糖尿病網膜症と放置中断

立川相互病院内分泌代謝科 宮川 高一

近年、検診の普及や糖尿病の啓蒙により多くの糖尿病患者が早期に発見、診断されるようになった。また、内科的および眼科的治療法の進歩により、個々の患者の状態に応じた適切な治療を受けられるようになってきた。

しかし、糖尿病と診断後放置している症例や、眼科初診後に受診を中断している症例があとを絶たず、糖尿病網膜症(以下、網膜症)は依然として日本における後天性視覚障害原因の第一位を占めている。診断や治療法の進歩した今日において、網膜症管理の上でもっとも重要なことは放置や中断を防ぎ、適切な治療のタイミングを逸しないことである。

【糖尿病の発症進展と放置・中断】

当院定期通院2型糖尿病患者のうち初診時に網膜症がなかった349名、罹病期間 10.8 ± 6.5 年、眼科観察期間 4.6 ± 3.7 年、放置中断歴 1.8 ± 4.3 年の患者において、網膜症発症者は89名あった。病歴の影響を除くため、罹病期間をマッチングさせると、放置中断歴(OR 1.11, $p < 0.001$)、平均HbA1c(OR 1.37, $p < 0.006$)の順に有意となった(比例ハザード変数増加法)。放置中断歴は重要な網膜症の発症因子である可能性がある。

【当院における眼科・内科連携システムと医療連携】

当院の糖尿病定期受診者数は約1580名である。教育入院・初診教室での網膜症教育を眼科医の参加も得て行っている。糖尿病眼科は予約制であり、眼科カルテのコピーが内科および紹介医療機関に送付され、糖尿病手帳にも記載される。予約日に未来院であると内科および紹介医療機関に連絡され、内科側が責任を持ち、患者に眼科受診をすすめている。この結果、内科定期受診者でかつ当院眼科管理者の場合、94%が眼科を定期受診していた。しかし当院内科患者で、他医療機

<平形先生>

関の眼科管理患者では定期受診が確認できた者は80%と有意に少なかった($p < 0.0001$)。

【地域における眼科内科連携の向上】

放置中断者は減少させるには地域的な取り組みが重要である。糖尿病治療多摩懇話会では、地域眼科医・地域内科医と糖尿病専門医の定期的研究会を開催している。当会では、内科医119名、眼科医44名にアンケートをおこなった。内科医のうち治療開始において眼底所見を必ず参考に行っている医師は61%にすぎず、内科医と眼科医のコミュニケーションが十分とれていると答えたのは内科医49%にたいし、眼科医は14%にすぎなかった。内科医は「手紙」を、眼科医は「糖尿病手帳」を連携の手段と考えていた。80%が「連携の為の情報提供書」が必要と考えていた。そこで当会では3枚綴りの「糖尿病網膜症診療情報提供書」を作成し普及につとめた。

【糖尿病眼手帳の作成】

平成13年の日本糖尿病眼学会総会のシンポジウムが契機となり、「糖尿病眼手帳」が作成された。現在眼科医を中心に配布が進んでいるが、特に内科専門医と眼科医とのあいだで急速に普及しつつある。経過観察に毎回「診療情報提供書」を記載しなくて済み、内科の「糖尿病健康手帳」とともに、眼科内科連携の連絡帳として役立つからであろう。また糖尿病療養指導士の患者教育上も重要なツールと考える。



<宮川先生>

糖尿病網膜症における眼科内科連携



東京医大八王子医療センター 内分泌代謝科
植木 彬夫

今回のパネルディスカッションは杏林大学眼科助教授平形先生と宮川先生、大野先生をパネルに、内科と眼科の連携、およびそのツールとしての糖尿病眼手帳についてディスカッションをおねがいしました。

宮川先生からは糖尿病眼手帳は内科と眼科の間で定期的に情報を共有することが出来る、特に網膜症のツールとしては非常に有効であると意見が交わされた。

また大野先生からは糖尿病手帳や血糖自己管理ノートと共に眼手帳は常に一緒に持つ様に指導しており、患者自身が写真や数字の情報を知ることより、患者の自己管理に有効であると意見を述べられた。

平形先生からは眼手帳を用いる事により、内科医が眼の話をするのに大変有効だと述べられた。

三名の先生方は共に眼手帳の有用性を述べられた。出席された医療スタッフには眼手帳を持参することを患者に勧めていく意識を持つ事が大切であることを訴えられた。

眼科内科連携について、平形先生は眼科内でも専門分野に別れているのでDM専門の眼科が将来出来てくる可能性

があると述べられ、地域の眼科もこれからはその専門性を表示することも必要であろうと述べられ、また眼科からも血糖コントロールが重要であると患者に積極的に働きかけることが必要であると述べられていた。

また大野先生は眼科開業医アンケートの中で内科医から眼科医の紹介がまだまだ少ないと指摘があり今後さらに眼科受診を進めて行く事が重要であると述べていた。また糖尿病網膜症の分類についても適切なクリニカル分類についての議論が必要であろうと意見を交わされた。



<パネルディスカッション風景>

事務局からのお知らせ……………

日本医療企画発行「ばんぶう」が、NPO法人西東京臨床糖尿病研究会 第24回例会の報告記事と、当研究会についての簡単な紹介を掲載しています。どうぞ、ご覧下さい。

「ばんぶう」12月号 日本医療企画
105ページ 情報スクランブルのページ

年末年始のお知らせ

12月29日(月)から1月7日(水)まで、事務所はお休みをいただきます。どうぞよろしくお願い致します。

NPO法人
西東京臨床糖尿病研究会

〒185 - 0012

東京都国分寺市本町3 - 10 - 22

オリエントプラザ402

TEL 042(322)7468 (10:00~12:00 13:00~16:00)

FAX 042(322)7478

Email: w_tokyo_dm_net@ybb.ne.jp

ホームページもご覧ください。
<http://www.nishitokyo-dm.net>